卒業生によるＩＣＵ在学経験の評価

――国際基督教大学創立25周年記念卒業生追跡調査報告（要約）――

トロイヤー, M. E.
原　一　雄
原　喜　美
田　中　清　彦

はしがき
Ⅰ．目的
Ⅱ．方法
1.　被調査者
2.　質問紙
3.　資料の整理と統計的処理
Ⅲ．結果
1.　卒業生の一般的特性
2.　評価の全体的傾向
Ⅳ．考察
1.　ＩＣＵにおける国際的経験の評価
2.　ＩＣＵにおける宗教的経験の評価
3.　大学のサービス機能とその機関の評価
4.　学生活動と学生会
5.　グループ間にみられる顕著な差異
Ⅴ．結論
付録

はしがき

このたび，国際基督教大学（ＩＣＵ）創立25周年を記念し，卒業生による在学経験の評価に関する調査を施行することができたことは，研究に参加した者一同が等しく心から喜びとするところである。

この報告は，広く一般へ配布するために調査の結果を要約したものであり，別に詳細な総合的報告書[1]がＩＣＵ図書館に保管され，閲覧にも供されている。ここでは，将来，更にこの問題について検討を重ねるために，卒業生から寄せられた回答に含まれている意味を，疑問ないし仮説の形で問うている。調査者自身も，未だこれらの回答の持つ意味を十分に解釈し把握し得たとは云うことができない。それゆえ，大学の方針決定ならびに教学計画の責任を持たれる方々は，より詳細な報告書を更に検討されるよう希望するものである。

Ｉ．目　的

ＩＣＵの創立者たちは，国際基督教大学要覧第１巻第１号（1953）の第１頁目に，本学の理念達成のための努力目標として，４つの目標を明確に打ち出した。その第３番目には，次のように記されている。

「本学は……教育を振興し，自己批判と評価とによってその発展に寄与すること，……に努力する。」

そこで，われわれは本学の創立25周年を記念するに当り，卒業生の追跡調査を行ない，最初の四半世紀を経たＩＣＵが現時点においてできる限り卒直にその長所と短所を探り出し，次の四半世紀に向って新らたな教学計画を立てる際の参考資料に供したい，と考えたのである。

以上の目的を更に具体的に述べれば，本研究は，卒業生たちがかつて在学中に経験したＩＣＵの学園生活の諸々の側面につき，現在どの程度役に立ち，重要であると考えているかを評価させ，そこから本学が彼らに与え

た影響力を調べると云うことである。

なお，ここに用いた21の評価項目の外にも，回答者の在学中の生活，卒業後の進路，ならびに職業上や地域社会における活動状況などについて各個人から資料を求め，回答を分析し理解する時の基礎にしようと試みた。

Ⅱ．方　法

1.　被調査者

ＩＣＵ同窓会名簿に記された住所を基にして，同窓生2,734名（国内2,360名，海外374名）に，学長と同窓会々長の依頼状を付して質問紙を郵送したところ，547名から回答を得た。ただし，500名前後の者が住所変更の未届けその他の理由で質問紙を受け取っていないと推測されるところから，調査対象は2,200名中約25%と推定される。

2.　質問紙

この調査用質問紙の作成には，高等教育に関するセミナーの受講生が協力し，互に検討を加えた上，発送を手伝った。4頁にわたる調査項目（付録参照）は，下記の3部20問から成り立っている。

第一部：個人的記録

ＩＣＵ在学時代，卒業後，ならびに現在の身上について質す。これらの回答の分類によって，後に述べる群間の比較分析が行なわれた。

第二部：大学生活の評価

在学中に得た各種の経験を顧みて，その有用度と重用性を5段階尺度を用いて評価する。そこで次の4領域に分けられる21の項目が用意された。

ａ～ｃ：カリキュラム

ｄ～ｌ：全学的プログラム

ｍ～ｐ：課外活動

ｑ～ｒ：学園生活

第三部：人生観，職業，国際性などの生活態度に関する記述

この種の回答は断片的，主観的であっても，ＩＣＵから受けた精神的衝撃の焦点が何処にあったかを浮き彫りにさせると考えられる。

3.　資料の整理と統計的処理

第三部の記述的回答も，範疇別に分類された上，すべてがコード化され，ＩＣＵ計算センターのＩＢＭ1130電子計算機によって処理された。

まず各質問について，回答全体の分布と，もし意味のある場合には平均と標準偏差が求められ，次に主要な下位群，例えば性別，日本人対ノン・ジャパニーズ，卒業年度群などについて，同様の計算が行なわれた。

在学中の経験を評価してもらう21の項目については，有用度と重要性のそれぞれについて，５段階尺度による評価点が与えられているので，記名の有無，男女などの下位群毎に，尺度値の分布と平均が求められた。また下位群間の比較を行なうため，カイ二乗検定によって分布の差異の有意性が検証された。

Ⅲ．結　果

1.　卒業生の一般的特性

表１は，質問紙の最初の16問，すなわち個人的記録の分類項目別頻度の分布と百分率を示す。ただし，１問中に２項目以上回答の重複を許した問については，反応数のみが示されている。

この表から指摘される回答者の特徴は，次の通りである。（カッコ内の数字は質問紙と表中の項目番号を表わす。）

○回答者の76%が記名した。（１）

○男女ほぼ同数が回答した。（２）

○70%が関東地方，８%が近畿地方，11%が海外に在住する。（３）

○94%が日本人である。（４ａ，ｂ）

○29%が基督教信徒，他のほとんどは無宗教（28%）か無回答（36%）である。（5）

○72%が既婚者である。（6）

○回答者の標本は大よそ専修学科別卒業生の数に比例する。（7 b）

○全卒業年度から回答が平均して得られた。（8）

○38%が大学院の勉学を経験し，23%は修士号を，6%は博士号を多様な研究分野で取得した。

○61%が海外へ出た経験がある。（11）

表1　分類項目別回答数と百分率

項　目	人数	%
1．記　名		
有	415	75.9
無	132	24.1
2．性		
男	285	52.1
女	260	47.5
無回答	2	.4
3．現住所		
北海道	15	2.7
東　北	9	1.6
関　東	380	69.5
中　部	19	3.5
近　畿	46	8.4
中　国	2	.4
四　国	5	.9
九　州	12	2.2
海　外	59	10.8
4 a．国　籍		
日　本	514	94.0
北　米	18	3.3
欧　州	3	.4
アフリカ	—	—
アジア	6	1.1
南　米	—	—
太平洋	1	.2
無回答	6	1.1
4 b．市民権		
日　本	413	75.5
北　米	25	4.6
欧　州	3	.5
アフリカ	—	—
アジア	4	.7
南　米	—	—
太平洋	1	.2
無回答	101	18.5
5．宗　教		
新　教	158	28.9
旧　教	11	2.0
仏　教	22	4.0
神　道	1	.2
その他	6	1.1
無神論	1	.2
無宗教	151	27.6
無回答	197	36.0

項　　目	人　数	%
6．結婚歴		
既　婚	393	71.8
独　身	142	26.0
離　婚	6	1.1
再　婚	2	.4
無回答	4	.7
7．専修学科		
人　文	93	17.0
社　会	203	37.1
理（自然）	57	10.4
語　学	90	16.5
教　育	49	9.0
I　D	8	1.5
大学院・教育	30	5.5
〃　・行政	3	.5
無回答	14	2.6
7 c．教員免許		
英　語	80	14.6
理　科	—	—
数　学	—	—
社　会	18	3.3
宗　教	—	—
不　明	65	11.9
無　し	384	70.2
8．卒業年度（学部＋大学院）		
'57	29	
'58	25	
'59	26＋1	
'60	37＋1	
'61	24＋3	
'62	19＋4	
'63	15＋2	
'64	18＋3	
'65	31＋2	
'66	23＋4	

項　　目	人　数	%
'67	23＋2	
'68	24＋6	
'69	39＋5	
'70	22＋4	
'71	25＋3	
'72	29＋6	
'73	34＋5	
'74	23＋5	
無回答	81	
9．学位		
BA	450	
MA	60	
10．大学院進学		
（場所）		
国　内	126	23.0
海　外	82	15.0
無　し	399	62.0
（在学校数）		
1	153	28.0
2	40	7.3
3	14	2.6
無　し	340	62.2
（在学期間）		
3ケ月以下	6	1.1
6ケ月　〃	1	.2
1年　〃	4	.7
1年以上	27	4.9
2年　〃	59	10.8
3～4年	53	9.7
5～6年	34	6.2
7～9年	15	2.7
10年以上	1	.2
無回答	347	6.34
（取得単位）		
MA	125	22.9
MS	3	.5

項　　目	人　数	%
Ph. D.	29	5.3
他の博士号	6	1.1
無回答	384	70.2
（専門分野）		
人　文	31	5.7
社　会	63	11.5
自　然	21	3.8
語　学	17	3.1
教　育	60	11.0
医　学	4	.7
法　律	3	.5
宗　教	2	.4
工　学	2	.4
無回答	344	62.9
11. 海外旅行		
（地方）		
北　米	174	
欧　州	103	
アフリカ	2	
アジア	43	
南　米	3	
太平洋	10	
（回数）		
1	275	50.3
2	47	8.6
3	9	1.6
4	2	.4
5	1	.2
6	1	.2
無回答	212	38.7
（滞在期間）		
3ケ月以下	102	
6ケ月 〃	35	
1年 〃	16	
1年以上	89	
2年 〃	41	

項　　目	人　数	%
3～4年	40	
5～6 〃	14	
7～9 〃	17	
10年以上	21	
（目的）		
留　学	97	
研究・教職	56	
政府公用	—	
商　用	89	
観　光	48	
その他	36	
12. 在学中の住居		
自　宅	256	46.8
下　宿	109	19.9
寮	175	32.0
無回答	7	1.3
（寮生）		
第Ｉ男	36	
第Ⅱ男	27	
カナダ	15	
第Ｉ女	24	
第Ⅱ女	31	
第Ⅲ女	9	
第Ⅳ女	11	
シベリー	8	
13. 課外活動		
学生会	67	
出版（新聞）	28	
文化系	261	
スポーツ	199	
奉仕活動	95	
その他	77	
14a. 職業		
（主）		
専門職	87	15.9

項　　目	人　数	%
学　生	36	6.6
研究・教職	99	18.1
管理職	53	9.7
事　務	62	11.3
主　婦	124	22.7
自　営	7	1.3
その他	11	2.0
無回答	68	12.4
(副)		
専門職	14	
学　生	8	
研究・教職	59	
管理職	2	
事　務	7	
主　婦	6	
自　営	7	
その他	18	
14b. 企業・機関の種類		
貿　易	43	7.9
生　産	50	9.1
銀行・金融	27	4.9
通信・広告	29	5.3
官庁・役所	67	4.8
社会福祉	2	.4
宗　教	8	1.5
教　育	101	18.5
その他	67	12.2
無回答	194	35.5
14c. 企業主		
日　系	266	48.6
北米系	56	10.2
欧州系	13	2.4
アフリカ系	—	—
アジア系	—	—
南米系	—	—
太平洋州系	2	.4
多国籍	14	2.6
無回答	196	35.8
15. 地域活動		
教　会	90	
市　民	46	
職業別	49	
奉仕団	24	
その他	49	
16. 機会と責任		
直接に関係	256	46.8
僅かに関係	185	33.8
無関係	64	11.7
無回答	42	7.7

○多種多様な専門的職業に従事する卒業生の中で，教育関係者が最も多い。（14a，b）

○就職者の内，約4人に1人が外国系または多国籍企業や組織機関で働いている。（14c）

○80%は在学中に抱いていた関心や受けた教育が，卒業後の仕事に少なくとも何らかの関係があると認めている。（16）

2.　評価の全体的傾向

表２と表３および図１に，在学中の経験21項目に対する卒業生の有用度と重要性の評価値が示されている。「取りわけ」，あるいは「大層役に立つ」とか，「極めて」，あるいは「大層重要」であると考えられるプログラムは，図表の上方に配置され，「適切」，あるいは「重要」と考えられるものがその次に続き，一般的に「あまり役立たない」か「それほど重要でない」項目が下方に並べられている。これらのプログラムが異なる下位群によってどのように評価されているかについては，次章で詳細に検討することとし，ここでは全体的傾向について，二三の点を指摘したい。

表が示すように，評価点は巾広く分布しているが，評価は相対的に肯定的であり，否定的に傾く項目は有意度で３つ，重要性で５つが教えられる

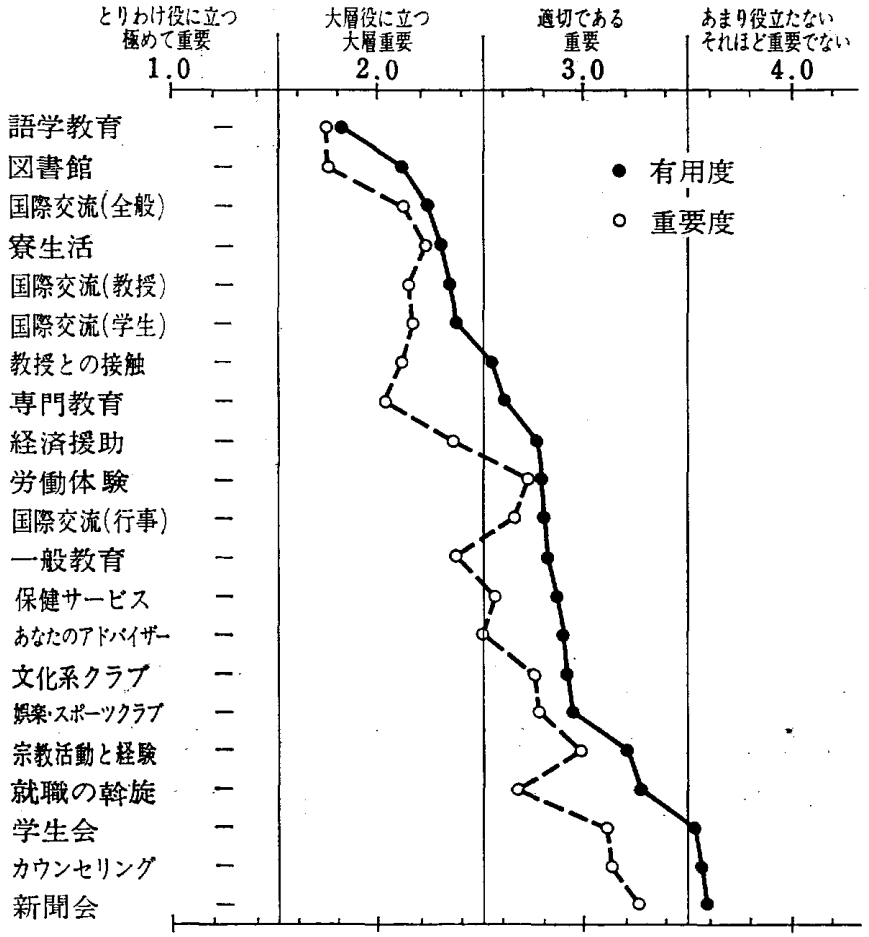

図1　全回答から得られた有用度と重要度の平均値

表2　全回答者の有用度評価点の分布とその百分率

	回答数				
	取りわけ役に立つ 1	大層役に立つ 2	適切である 3	あまり役立たない 4	無駄である 5
語学教育	224	185	88	24	0
図書館	157	196	135	41	2
国際交流（全般）	110	138	110	50	2
寮生活	101	131	128	32	11
国際交流（教授）	111	136	135	61	5
国際交流（学生）	99	147	133	64	4
教授との接触	92	153	180	88	9
専門教育	96	136	168	119	3
経済援助	94	87	145	99	36
労働体験	48	113	150	61	32
国際交流（行事）	66	94	136	122	10
一般教育	49	122	219	106	11
保健サービス	39	96	272	76	16
あなたのアドバイザー	77	107	162	146	32
文化系クラブ	32	96	235	88	17
娯楽・スポーツクラブ	39	75	225	90	16
宗教活動と経験	39	66	197	148	50
就職の斡旋	27	56	179	153	38
学生会	15	32	166	196	54
カウンセリング	15	54	128	206	69
新聞会	11	29	158	175	63
その他	11	7	10	2	3

にすぎない。

有用度と重要性の間で順位差相関.923が求められ，両尺度間に高い相関が示唆される。やや大きな差異が専門教育，一般教育，就職の斡旋などに見い出され，いずれも重要性ほどには役立たなかったと評価されている。

Ⅳ．考　察

1.　ＩＣＵにおける国際的経験の評価

		%				
計	平　均	1	2	3	4	5
521	1.83	43.0	35.5	16.9	4.6	—
531	2.12	29.6	36.9	25.4	7.7	.4
410	2.25	26.8	33.7	26.8	12.2	.5
403	2.30	25.1	32.5	31.8	7.9	2.7
448	2.35	24.8	30.3	30.1	13.6	1.1
447	2.38	22.1	32.9	29.8	14.3	.9
522	2.55	17.6	29.3	34.5	16.9	1.7
522	2.61	18.4	26.1	32.2	22.8	.6
461	2.77	20.4	18.9	31.5	21.5	7.8
404	2.79	11.9	28.0	37.1	15.1	7.9
428	2.80	15.4	22.0	31.8	28.5	2.3
507	2.81	9.7	24.1	43.2	20.9	2.2
499	2.86	7.8	19.2	54.5	15.2	3.2
524	2.90	14.7	20.4	30.9	27.9	6.1
468	2.91	6.8	20.5	50.2	18.8	3.6
445	2.93	8.8	16.9	50.6	20.2	3.6
500	3.20	7.8	13.2	39.4	29.6	10.0
453	3.26	6.0	12.4	39.5	33.8	8.4
463	3.52	3.2	6.9	35.9	42.3	11.7
472	3.55	3.2	11.4	17.1	43.6	14.6
436	3.57	2.5	6.7	36.2	40.1	14.4
33	—					

本学の掲げる真の国際性は，学園生活のすべての面に浸透していると思われるが，その中でも特に教授会，教学計画，図書館が影響力の主たるものであると考えられる。そこで，ＩＣＵのプログラムの内，まず最初に上記３点について報告を行なうこととする。

ＩＣＵのプログラムの国際的側面――語学教育，図書館，国際的教授陣や留学生との交流，およびすべての寮が国際寮であるという前提の寮生活について，創立以来25年間，卒業生の過半数は「とりわけ役に立つ」又は

表3　全回答者の重要度評価点の分布とその百分率

	回答数				
	極めて重要 1	大層重要 2	重要 3	それほど重要でない 4	全く重要でない 5
語学教育	264	142	101	11	1
図書館	261	153	87	21	2
国際交流（全般）	138	129	100	41	3
寮生活	121	143	111	40	10
国際交流（教授）	144	138	123	40	2
国際交流（学生）	136	143	125	36	6
教授との接触	174	271	126	47	5
専門教育	198	152	126	41	2
経済援助	145	125	124	50	31
労働体験	59	109	150	66	29
国際交流（行事）	86	93	141	98	11
一般教育	130	131	173	59	11
保健サービス	81	124	231	45	16
あなたのアドバイザー	122	135	157	87	22
文化系クラブ	51	112	227	70	15
娯楽・スポーツクラブ	52	92	224	74	13
宗教活動と経験	74	84	161	132	48
就職の斡旋	67	125	190	58	27
学生会	42	70	194	124	42
カウンセリング	41	79	174	137	47
新聞会	24	63	179	129	53
その他	12	6	9	4	4

「大層役に立つ」という評価を与えている。（表1，2と図1）

大学の学問的及び専門的水準において，外国語により速やかに学習し，またお互いに時間の無駄なく意志を伝達するためには，最初の1年次における読み，書き，話し，聴く力の継続的・集中的訓練を必要とする。また，学生各自が自己の進歩について評価を行ない，学習の成果と誤りを確認し，より秀れんための努力目標を定めるに当って援助を必要とする学生たちが出すレポートは，思考の組み立て，文法，句読点，文章構成，綴り

		%				
計	平　均	1	2	3	4	5
519	1.73	50.9	27.4	19.5	2.1	.2
524	1.75	49.8	29.2	16.6	4.0	.4
411	2.12	33.6	31.4	24.3	10.0	.7
425	2.23	28.5	33.6	26.1	9.4	2.4
447	2.14	32.2	30.9	27.5	8.9	.4
446	2.17	30.5	32.1	28.0	8.1	1.3
523	2.11	33.3	32.7	24.1	9.0	1.0
519	2.03	38.2	29.3	24.3	7.9	.4
475	2.36	30.5	26.3	26.1	10.5	6.5
413	2.75	14.3	26.4	36.3	16.0	7.0
429	2.66	20.0	21.7	32.9	22.8	2.6
504	2.38	25.8	26.0	34.3	11.7	2.2
497	2.57	16.3	24.9	46.5	9.1	3.2
523	2.52	23.3	25.8	30.0	16.6	4.2
475	2.76	10.7	23.6	47.8	14.7	3.2
455	2.78	11.4	20.2	49.2	16.3	2.9
499	2.99	14.8	16.8	32.3	26.5	9.6
467	2.68	14.3	26.8	40.7	12.4	5.8
472	3.11	8.9	14.8	41.1	26.3	8.9
478	3.14	8.6	16.5	36.4	28.7	9.8
448	3.27	5.4	14.1	40.0	28.8	11.8
35	—					

などについて系統的に分析され，誤りの指摘がなされねばならない。練習課題や会話の録音についても同様である。このためには，優秀な教授陣，授業計画，ラボ施設は欠くべからざるものである。外国語の訓練は，引き続きその言語で内容のある講義を受けることにより，一層学習意欲が高められ，語学力が強化される。ＩＣＵにおける語学教育は，卒業生の78.4%によって「とりわけ役に立つ」又は「大層役に立つ」と見なされている。「無駄である」と答えた者は一人もおらず，「あまり役立たない」という

回答も24名にすぎなかった。

語学の訓練には費用がかかり，且つ学生の時間をとるものである。しかし，果してそれだけの価値があるものであろうか。明らかに，ＩＣＵの卒業生は圧倒的に価値ありと信じている。語学教育は他のいずれのプログラムよりも，有用度と重要度共に最も高く評価されている。しかしながら，このことは，卒業生が２ケ国語，又は数ケ国語を駆使し得る能力をもって，一般教育や専門教育の代替物と見なしていると云うわけではない。語学力を身につけることによって，学識を一層広げ，その教育のすべてを活用して専門分野への門戸を開くことが出来る点を評価しているのである。

図書館は，有用度も重要度も共に第２位となっている。現在，ＩＣＵ図書館は18万冊の図書の45％と1000種に上る定期刊行物の55％を海外より購入しており，日本十進分類法（ＮＤＣ）を採用し，同じ表題をローマ字と日本語の両方で表示する単一カタログ制度を持つ，恐らく世界で唯一の秀れた国際的大学図書館であろう。それゆえ，今までにしばしば他大学から図書館員が研修のために派遣されてきた。1952年，最初の学生が入学した時は，この小規模ながらも自由に図書の閲覧ができる開架式図書館を備えた大学は，日本全国でただＩＣＵのみであった。現在は日本の大多数の大学図書館が，部分的開架式を採用している。

３年間にわたる調査によると，学生の借り出した図書の冊数は，１人当り年間78冊であった。しかも，これは館内での自由閲覧を除外した数である。アメリカ合衆国における平均は１人当り年間27冊であり，最高がある大学における49冊という数であったことから見ても，その利用率の高さがうかがえる。ＩＣＵ図書館は創立以来，他に類を見ない程高度の発展を遂げ，秀れたサービスを提供してきたと云えよう。

このように質の高い図書館の管理とサービスを行なうことができたのは，単に事務職員の手にまかせず，専門的訓練を受けた司書が，教授や学生たちの学術的活動を支える上で非常に重要な役割を果してきたからである。もしこれら専門的司書を教授陣の中に加えないならば，せめて教育職

員の身分が与えられて然るべきではないだろうか。

国際的で利用度の高い図書館は，その建築と維持運営に多額の費用を要するが，果してそれに値するものだろうか。ＩＣＵ図書館を利用した経験のある卒業生の評価は，明らかにそれを肯定する。66.4%が「とりわけ役に立つ」又は「大層役に立つ」とし，75%が「極めて重要」又は「大層重要」と評定している。

それでは，この知識が爆発的に増大し，書物や雑誌が氾濫し，図書費が高騰を続ける今日，どのようにしてこの高い水準を今後も保つことができるであろうか。これはＩＣＵの理想の実現に対する挑戦であり，綿密な計画を必要とする。

国際的交流の経験，中でも海外からの教授や学生との交流は，有用度も重要度もその次に位する。ここで国際的と云う場合，それは日本人とノン・ジャパニーズの行政者，教授ならびに学生との交流経験を意味する。名称に盛られる目標は，えてして有名無実に終りがちなものであるが，ＩＣＵの国際性に関する限り，そのようなことは決してない。大よそ60%の卒業生が国際的経験を「とりわけ役に立つ」又は「大層役に立つ」と答え，65%が「極めて重要」又は「大層重要」と評価した。

海外から教授を招くことは，時間的にも財政的にも高価なものである。異なった文化・国籍・人種・言語・宗教・教育的伝統を持つ教授たちやその家族の間で一つの共同体意識を育むことは，この人たちを招いた側の重い責任であり，すべての人々の協力と献身を必要とする。そして国際的な教授陣の持つ力を十分に活用し，同じく国際的な学生集団の期待に応えることのできるプログラムを立てるためには，より同質の大学と比べ，遙かに多くの時間と労力と洞察力が要求されることになる。果してこのような，時間と労力と費用と献身という大きな代価を払うだけの価値があるのだろうか。この問に対し，明らかに卒業生の大多数は，「ある」と信じている。

卒業生の３分の１は，アドバイザー制度を「とりわけ役に立つ」又は

「大層役に立つ」と見なし，また3分の1は「適切である」とし，そして残りの3分の1が，アドバイザーは「あまり役に立たない」又は「無駄である」としている。しかし，重要度については，「極めて重要」又は「大層重要」と答えた者が半数以上に上り，5分の1は「それほど」又は「全く重要でない」と答えた。このことは，アドバイザーの有用度を低く評価した者の約半数が，アドバイザーを必要としなかったことを意味するのであろうか。しかし，前述のように，卒業生は「教授との接触」を高く評価している。これらを考え合わせると，或いは学生の個人的欲求に眼を向けるよりも，アドバイザーは共同社会や小集団の目標や成り行きについて，よりよき手助けができると云うことを意味しているのではなかろうか。

専門教育は，有用度において国際的経験の次に位するが，重要性では反対に国際的経験の上にくる。44%の卒業生は「とりわけ」又は「大層役に立つ」と答え，32%は「適当」としている。これに対し，重要度については69%が「とりわけ」又は「大層重要」とし，単に「重要」とだけ答えたものは24%である。専門教育の有用度は，21の項目の中で他のいずれよりも遙かに学生の期待からはずれており，この評価は，語学科学生と大学院卒業生をのぞいて，他のすべての専攻分野の学生に共通している。

一般教育は，有用度が専門教育よりもやや低く，重要度は国際的経験よりも少し下となる。有用度と重用度との開きは専門教育ほど大きくはない。これらの回答は，まさに専門教育と一般教育が，今後相当の改善を必要としているという要請と見なすべきであろう。

専門教育と一般教育は，いかなる高等教育プログラムにおいても極めて重要な側面である。ＩＣＵが学問的に必須とする第一のものは教養教育（liberal education）であった。そのため，綿密な配慮の下に，一般教育と専門教育のプログラムが立案・展開された。そして，それらは，専門学科と関連のある基礎コース（学際的専攻生には諸学科間にわたった基礎コース）が設けられ，専門領域への地固めが行なわれた。これらの項目に対する回答のちらばり方を分析すると，相当に高い成功と，見過すことので

きない不成功の意見の両端が現わされている。

専門教育と一般教育の間に存在する教科内容のせり合いは，また時間の配分における対立でもある。まず最初に問題となる点は，（人間を個人として，又家族の一員として，更には彼の住む地域と社会の活動に参加する市民として，自らを啓発し有効に生活させるための）一般教育と，これに対し，（個人の持つ特殊な才能と興味を彼の一生の仕事に役立たすことが出来るよう援助する）専門教育との間の競争である。之は教科内容のせり合いである。

「彼はますます成長して強くなり，知恵に満ち，そして神の恵がその上にあった。」この聖書の記述に見られるような均衡を保つ事が問題なのである。一般教育は，広い地平線の上に近くも遠くも眺めるが，専門教育は狭い視野の中にとらえた目標に向って進む。そのため，もし両極端に走れば，一般教育は「何でも屋だけれど何一つまともなものなし」と云う人間を作り出し，他方専門教育は，たとえ一つの領域では天才であっても，他の学問的・社会的・科学的分野の重要問題の解決にあたっては全く無能な「専門バカ」を作り出してしまう。専門化の進展にともない，一般教育の必要性も同時に増大する。今までは，専門教育が技術の進歩にとっての源泉であり，同時にその結果でもあったことはあきらかである。ところが現在，技術至上主義によってもたらされた人口爆発，汚染，資源の枯涸等の諸問題は，広い人間的関心と広遠なビジョンを持たせるような教育なしでは解決できないことが，ますます明白になってきた。これこそ教養（一般）教育の役割なのである。

文化を異にした者同志のコミュニケーションを可能ならしめる機能的な語学力は，数学，音学，美術と同じ様に，一般教育と考えることが出来よう。では果して，ＩＣＵにおいて，このように考えられて来たのだろうか。大学のレベルで，文化の壁を越えて，外国語を聞き，話し，読み，書くことを有意義に学習するために，その主題と教材を一般教育と関連させて盛り込むことを考えてきたであろうか。もしこのようにできれば，語学教

育・一般教育・専門教育の間に起こる時間的，内容的なせり合いも無駄なく調整されるばかりでなく，語学教育としても最も効果的な方法であろう。内容に関しては，既に相当な程度，ＩＣＵの語学教育プログラムの中に盛り込まれておる。今後は教授陣とプログラムの総合化が必要である。それによって，学生達は語学と一般教育を組み合わせてとることが可能となり，２カ国語による能力を身につけることが出来る。ただし，ここでもしも英語その他の語学科の教授陣を二流の学者として取扱うようなことがあれば，このアプローチは失敗に帰してしまう。卒業生がＩＣＵの語学教育の有用度と重要性に対して下した評価に照らしてみれば，ＩＣＵにおいてはこの問題は既に解決ずみだと言えるであろう。

学部レベルにおいて，どの程度の内容を専門教育の分野で詰め込むべきか，との問に対する答えは明瞭である。即ち，自然と社会の中における人間の価値を教える一般教育の役割を剝奪しない限り，あらゆるものが可能である。この答えは，今回，卒業生が専門教育へ与えた重要性を十分に満足させるものではないかも知れない。しかし，これからはますます生涯教育の場として新しい機会が与えられ，卒業後も，更に深く一般教育も専門教育も受けることが可能になるであろう。そうなれば，学部のプログラムをある範囲にとどめておくことも許されよう。生涯教育のプログラムは，市民に対して社会の諸問題と取り組み，新しい解決法を探ることを助け，卒業生にはそれぞれの専門に関する知識を最新のものにできる。こうしてＩＣＵキャンパスの教育の中に生涯教育を組み入れて行くことにより，一般教育と専門教育の間に残る時間的配分のせり合いにも，何らかの答えが与えられるであろう。

これは篠遠学長から提出された企画であり，ＩＣＵのプログラムの中でも画期的で重要なものの一つとなるであろう。この実現には慎重な計画を要するが，それまでの方針としては，現存する高学年の各学科コースの中に新しい専門的知識を組み込んで行くことの方が，専門的コースの分芽増殖を行なうより単に経済的であるばかりでなく，より意義深く，より良き

教育へ発展する可能性を秘めていると言える。これまで論じてきたＩＣＵの諸々のプログラムに対して卒業生が与えた有用度の評価は，一般には今まで重要ではあっても実現が困難だとされていた課題について，ＩＣＵにおいて稀にみる成果を挙げてきたことを示している。常に難題を抱えているため，多くの教授から厄介払いされがちな一般教育でさへ，卒業生の答回は33.8%が「取りわけ有用」又は「大層有用」，43.3%が「適当」と云い，「有用性を欠く」との答えは23.1%に過ぎない。

しかしながら，ここで注目すべきことは，次にあげるグループに属する人々が，（図書館以外について）国際的側面の有用度と重要性に関する評価において比較的低かった。

a）無記名で回答用紙を返却した人々。

b）無宗教か，又は宗教の記入のなかった人々。

c）独身者又は離婚者。

d）最近の卒業生。

e）海外へ留学又は就職した経験のない人々。

f）大学院へ進学しなかった人々。

g）最近になって建てられた寮で生活した人々。

h）地域社会の諸活動（教会，市民，専門，福祉活動など）に参加していない人々。

i）在学中の関心や教育と，現在携わっている仕事との関連性が低いか又は全くない人々。

j）ＩＣＵでの経験が「現代社会における日本」についての見方を作るのに役立たなかった，と答えた人々。

k）自分たちの子女をＩＣＵに入学させたくない，と答えた人々。

これらのグループは，例え少数であっても，独特の国際的使命を担うＩＣＵを存続させ発展させる責任を持つ者に対して，大きな問題を投げかけている。ある意味では入学者の選考に際して，どのような方法で，大学

の掲げる目標と学生の抱く目的とを，うまく合致させるかの問題であろう。また別の観点からみれば，いかにして大学のプログラムを改善し，それらの学生をそこに参加させるのか，あるいは，学生の履修した専攻分野に出来るだけ関連の深い職業に就けるよう，どのように配慮したらよいのか。社会において新しく生ずる必要を満たし，しかも学生の関心と目標とに合致した新しい職場の開拓の為に，より多くの卒業生を十分準備させ世に送り出す必要のあることを示唆しているものとも考えられる。例えば，ＩＣＵの卒業生の中には，病院行政に携わる管理職の専門教育に新機軸を開いた人もいるし，年々増加する老人人口の求めに応ずる革新的行政企画に就事する卒業生も何人かいる。

これらの国際的な側面を持つプログラムは，最も経費のかかるものであり，そこで財政的危機に直面すると，真先に縮少削減に恰好の目標となりかねない。しかし，もしも，これらＩＣＵ独特のプログラムの秀れた側面が水増しされたり，程度を下げられたりすれば，ＩＣＵはその味も，生命力も，存続の意義も失ってしまうのではないだろうか。これらの諸問題とこの疑問は，この要約のうちの他の部分で指摘される諸々の問題点と無関係には論ずることの出来ないものである。

2.　ＩＣＵにおける宗教的経験の評価

ＩＣＵは，その大学名の中に，神と人と全宇宙に対するキリスト教的志向を明白に表わしている。卒業生は，このように言明した大学で，在学中の宗教的経験をどのように評価しているのであろうか。第２表は次のように示している。

とりわけ役に立つ	7.8%
大層役に立つ	13.2%
適当である	39.4%
あまり役立たない	29.6%
無駄である	10.0%

僅か0.6%しかキリスト者のいないこの社会において，上の回答はどのような意味をもつものだろうか。また宗教的背景の卒業生を持つキリスト教主義の大学において，一体これは何を意味するのだろうか。

ところで，回答を寄せた卒業生の内分けは次の通りである。

キリスト教	30.9%
東洋的宗教	5.3%
無宗教	27.8%
無回答	36.0%

なお，１期から４期までは，入学時において，25ないし29%がキリスト者であると自認している。その後は入学した学生のうち，キリスト者の比率は９ないし12%であった。キリスト教主義高等学校から，各校１名の推薦を受ける以外は，入学に当って，宗教的背景が選考基準として用いられることはない。

第１期生の就職状況は，驚くほど好調であった。創立当初の４年間，教授陣，カリキュラム，図書館，それにキャンパス全体が，何ら目に見える姿で整備，充実されてはいない時期に入学を希望した学生達は，大学の国際性と基督教主義のいづれか，又はその両方に関心を持つが故に希望し，大学の新しい試みに信頼を寄せていた。特に就職に際しては，新設の大学で，しかもキリスト教主義であって，国際性を強調する大学からの卒業生が，既存の日本社会の学閥の網が張りめぐらされている中に，どのようにもぐり込めるかについて，何らの保証もなかったのである。第１期生の就職状況が世間一般に知れ渡ると，志願者は急激に増加した。1956年には，５人に１人が入学を許可されたが，1957年には，これが11人に１人となった。そして，キリスト者の占める比率も低下したのである。ＩＣＵの志願者の中には，キリスト教主義に則った大学であるからというよりも，就職状況がよいからＩＣＵを受験するという学生がより多くなった。

さて，卒業生の評価と，彼等の宗教的背景とには，どのような関係がみられるだろうか。

a）東洋的にせよ西欧的にせよ，宗教を持った人々は，宗教を持たない人々，または無回答者と比べると，ＩＣＵのプログラムのほとんどすべての面について，有用度，重要性共に，多少あるいはかなり高い評価を下す傾向を示している。

b）プロテスタントおよびカトリック教徒は，東洋的宗教の信者および無宗教と答えた人々と比べると，ＩＣＵにおける宗教的経験の有用度，重要度について遙かに高い評価を与えている。

宗教的経験の有用度について，他と比較してかなり高い，或いは極めて高い評価を与えている人々には次のようなグループがある。

a）既婚者および再婚者。

b）１期から６期までの卒業生。

c）博士課程まで進学したグループ。

d）第一，第二男子寮と第一，第二女子寮の寮生。

e）文化系クラブ活動に参加した人々。

f）学生会の役員をつとめた人々。

g）地域社会の奉仕活動に参加した人々。

h）現在，教会・市民・専門・福祉団体などに属し，地域社会の奉仕活動に参加している卒業生。

i）現在従事している仕事が，自己の関心や興味，あるいは受けた教育と直接ないし多少関連があると答えた人々。

j）ＩＣＵにおける経験が「現代社会における日本」の見方に役立ったと思う人々。

k）自分の子供をＩＣＵに入学させたいと望んでいる人々。

ここで明らかになったことは，宗教的及びその他の経験が，初期の卒業生の20ないし30%，後の卒業生についてはもう少し低い割合の人々の生活において，色々な方法で互いに強め合っており，この相互に強化された経験は，奉仕活動へと志向させる傾向が見られるのである。もしこのことが

或る程度確かであり，奉仕への志向性が，種々の専門的分野や日常生活の中に浸透していくとすれば，ＩＣＵの宗教プログラムは，大学の重要な目的の達成の為に，大きな役割りを果しているといえるのである。以上のことは，大学およびＩＣＵ教会が方針やプログラムを決定する時点で，より深く検討を要することであると考えられる。

ＩＣＵに入学する学生のうち，卒業生の就職に有利であるという理由からやって来て，キリスト教は「無駄」であり「重要ではない」と考えるのみならず，恐らく彼らには苦痛であり，威嚇と感じられ，ＩＣＵの主要な目標である基督教主義の妥当性に対して挑戦する必要があると感ずる学生の数が増加していることは大問題である。これと同様なことが国際性についても云える。すなわち，文化的葛藤により脅迫感を抱き，ＩＣＵの国際性という目的に対して疑問をもつ学生も増加しているのである。そこでＩＣＵの政策決定者は一つの板ばさみに合う。ＩＣＵはこれらの不満な学生達の問いかけを上手に受けとめることが出来るだろうか。ＩＣＵはこの不満を効果的にやわらげたり，回避させることが出来るだろうか。ＩＣＵの本来の目的を達成させる為に，建設的でしかも抑圧的や統制的ではない雰囲気を醸すには，大学の方針とくいちがいを起こさず，両立出来る目的を打ち出すような学生の数がどの位であったらよいのだろうか。このような雰囲気を作り出す為には，25ないし35％のキリスト者の学生定員が必要だろうか。もしこのような定員割当制を設ければ，入学試験に際して特別のはからいをするという含みをもたせることになるであろう。また，学生の成績評価，経済的援助，就職の斡旋に際して，キリスト教徒に特別の配慮をするのではないかという，ぬぐい切れない疑惑の念を生じさせる結果となりはしないであろうか。

これらは，国際的でキリスト教主義の大学におけるキャンパスの風土に影響を与えるところの基本的な課題である。これらは，はたして宗教的志向をもつ大学の存立が可能であるかどうかの疑問を投げかける。大学のキャンパスにあっては，威嚇されていると感じ，不満にみちた学生達の方

が，言行不一致なキリスト教徒の学者より，その影響力において，一層効果的であるのかも知れない。

ここで重要であると考えられることは，大学行政部と教授会が，あらゆるイデオロギーをもつ学生と，絶えず対話の機会をもつことである。そして互いに違った相手を尊重するという強い決意をもって，お互いに自分たちの信念や価値志向を吟味し合い，直したり，強めたりする機会を十分に活用することである。

この絶大な重要性にかんがみて，問題は次のように述べることができよう。果してこれはどこまでが入学試験の基準の問題なのか，そして，どこまでが教育的プログラムの質の問題や雰囲気の問題として受けとめていくべきであろうか。いずれにしても，ＩＣＵが秀れた国際性を備えたキリスト教主義の大学として存在するためには，決してこのことを無視することなく，正面から受けとめていかねばならない課題である。

3.　大学のサービス機能とその機関の評価

403名の回答者によれば，寮生活は，他の側面とくらべ，かなりの開きを持って，最も役に立つサービス機能であると見なされている。しかも，この403名のうち寮生活を経験した人は，わずか32%に過ぎない。実際，寮生活に対する評価は，語学教育，図書館，国際的経験に次いで第4位に位している。但し，ＩＣＵの学生は，アカデミックな面以外の生活に高い評価順位を与えるのではないかと誤解されてはならないので，ここで一般の注意をひいておきたい。それは，重要度において，寮生活は専門教育や教授との接触ならびにアカデミック・アドバイザーよりも下に位置づけされている点である。

創立当初から，ＩＣＵではすべての学寮が国際寮(international house)となるべきであるという方針の下に，海外から来た留学生を1人ずつそれぞれの部屋に割当て，日本人と同室するようにはかった。このようにして，国際基督教大学の目的を，日常生活の中で実践し，学習する機会が与

えられるものとした。異なった宗教は，個人的接触の中でも，ぶつかり合った。これを教育と呼ぶ人もいたし，それを回避したいと望む人々もいた。大部分の学生たちは，それを有用かつ重要であると考えていたが，中にはその方針に盾つくものもいた。一般に初期の卒業生の方が，最近の卒業生よりも，寮生活の経験をより有用で重要なものと評価していることは注目に価する。実際，最初の８年が過ぎた時，ある寮の学生たちは，国際寮としての方針に挑戦し，学生の手による寮の完全自治の運動を行なった。国際的経験に関する卒業生の評価は，このＩＣＵの方針に影響されない学生の評価とは，逆のように思われる。

カウンセリングは，すべてのサービスの機能の中で最も低い評価をうけ，275名（58.4%）の卒業生が「あまり役立たない」或いは「無駄である」と回答した。また，184名（40.4%）が，「それほど重要でない」又は「まったく重要でない」と考えている。重要度に対する否定的評価は有用度のそれに比べると幾分少ないが，しかし，なお，かなりの割合を占めている。グループ別に回答結果を分析すると，カウンセリングは，プログラムの他の側面との関連でも，相変らず低い評価を受けている。しかし，次にあげるグループは他の同窓生より，カウンセリングを比較的役に立つとみなしている。

a）その東西を問わず，宗教的志向を持っている学生。

b）既婚者。

c）大学院卒業生及び教育学専修生。

d）初期の卒業生。

e）修士以上の学位を取得した人々。

f）高い学位を求めてより長く留学した人々。

g）第一・第二男子寮と第一・第二女子寮の居住者。

h）学生会執行部の仕事にたずさわった人々。

i）現在，経営者或いは家庭の主婦である人々。

j）教会並びに市民活動に参加している人々。

k）在学中の関心や受けた教育が，現在の仕事に直接つながっている卒業生。

l）ＩＣＵにおける経験が，現代社会における日本の立場を理解するのに役立ったと感ずる卒業生。

m）自分の子女をＩＣＵに入学させたいと思う卒業生。

カウンセリング・プログラムは，日本においては比較的新しいものである。日本の伝統によれば，カウンセリングは第三者を介して受けるのが慣わしである。そこで一対一で行なわれるカウンセリングに対して理解を持ち，敬意をはらうことができるようになるためには，いくばくかの時間を必要とするであろう。異文化から輸入された技術や方法は，その価値に限りがある。よって，それらは土着の文化に融合させ，発展させなければならない。例えば，高度に構造化された社会においては，非指示的カウンセリングあるいは来談者本位のカウンセリングは，直ちに受け入れられるような動機づけも，またその本当の意味あいも限定されてしまうことになるであろう。

個人的と集団的なカウンセリングについて事例研究を行なうことが，今後の参考になるかもしれない。例えば，初期にたてられた寮の寮生からは，カウンセリングは比較的役に立ち重要であると評価された。おそらく，古い寮の寮生にとっては，新しい寮の寮生よりも，大学の組織としての目標と学生自身の目標とが，より一層合致していたのであろう。もし，そうであるならば，寮アドヴァイザーとハウスマザーの選任にあたって，大いに考慮すべきことであろう。最近建てられた寮において，カウンセリングが第一に置く主要な目的は，不協和な目的にどのように対処するかということであり，その結果，相互の尊敬と信頼を得るための道が開けることであろう。すなわち，相互に尊敬し信頼し合うということが，学生問題に関して，個人的にも集団的にもカウンセリングを行なうための不可欠な条件なのである。この問題はまた，ＩＣＵにおける学園の自治と，学生新

聞の問題にも関係している。これらの点については，また後で論ずることにしよう。

ＩＣＵにおける他のサービス分野について卒業生が評価を与えているものには，経済援助，労働体験，保健サービス及び就職斡旋などがあった。労働体験と就職斡旋とは，別に検討されるであろう。

経済援助や保健サービスは，まず個人の主観的な必要性から評価され，他の学友たちの一般的必要性という観点はこの次になる。461人の卒業生のうち，20.4%が経済援助を「とりわけ役に立つ」，18.6%を「大層役に立つ」，31.4%が「適切」とみなした。残りの30%は，経済援助を「あまり役立たない」か「無駄である」としている。この意味するところは，ＩＣＵでのこの種のプログラムが，非常に効果的であったということである。そうというのも，実はどの学生も経済的理由だけによってＩＣＵに入学することが妨げられたり，あるいはＩＣＵを退学しなければならないことのないようにという経済援助の方針が確立しており，ＩＣＵ奨学金，貸与金，アルバイト収入や育英会奨学金を必要とし，かつ実際に受けた学生は，最も多い時には65%に達したこともあったのである。

しかしながら，経済援助のプログラムに低い評価を与える卒業生には，次の３つのグループがある。

a）最近６年間の卒業生。

b）男女とも比較的最近に建てられた寮に住んだ卒業生。

c）その職業が自分の関心や在学中に受けた教育と関係のない卒業生。

果して彼らの経済援助の申請が，あまり認められなかったのだろうか。経済援助プログラムに関する的はずれの批判が，最近建てられた寮の新入生に伝えられていったのだろうか。これらの批判はどこまでが真実なのだろうか。どこまでが誤認にもとづいていたのだろうか。

これらの疑問に対しては調査が必要である。また経済援助の性質やその巾について年次報告を学生に対して行なえば，誤解を未然に防ぐことにな

る。この18年間に，豊かさとインフレが相互に中和されてきたためであろう。経済援助の有用性と重要性は，1957年から1974年に至るまで，卒業生の間ではほぼ一定に保たれている。

経済援助と学費に関する方針とを関連させて検討すると，少なくとも理論的には以下のことが考えられる。すなわち，大学の経済援助に対する誓約であるところの，いかなる学生でも単に経済的な理由のみによってＩＣＵに入学することを妨げられたり，またＩＣＵを退学しなければならないことのないように大学は援助する，という方針を実施する以上，学生一人当りの経費にみあった学費を平等に徴収することも認めることになるであろう。もし政府が学生の一人当りの教育費の半額を補助するとすれば，学費は学生一人当りの費用の半分とすることができる。これは決して勧告というわけではなく，慎重な検討を要する一つの仮説に過ぎない。いかに適切な経済援助の計画でも，その目的と手続きと，そしてその成果を，活発な広報活動の計画の下に，学生および教職員に断えず知らせることなしには，十分に理解されることは困難であろう。

499人の同窓生のうち，7.8%はＩＣＵの保健サービスのプログラムを「とりわけ役に立つ」とみなし，19.2%は「大層役に立つ」，54.5%は「適当である」とみなした。残りの18.5%が「ほとんど役立たない」又は「無駄である」とした。ＩＣＵの保健サービスを「適当」又はそれ以上と考えた81.5%は，自分達の必要とするものを十分に自覚していたと推察してよいのだろうか。また，保健サービスをほとんど無用，あるいは全く無用とみなした18.5%の人々に，全く健康上の問題がなかったと考えてよいのだろうか。これらの疑問に対する答えは，公式にせよ，非公式にせよ，健康管理の教育的機能の有効性に関わるものである。

保健室の看護婦や医者たちは，保健と体育の合同計画に関与し，それを支えてきた。彼らは専門の訓練を受けており，専門的なサービスを提供している。現在これらの人々は，ＩＣＵ内での地位および給与体系において，それ相応に格付けされているのだろうか。

労働体験に対する回答結果をみると，この質問項目は，少々あいまいであったようである。これを，いわゆる「アルバイト」ととった人もあれば，あるコースの中の野外実習とか，また，学生会の主催する奉仕活動と受け取った人もある。これらすべての解釈を含め，40%の人々が，労働体験を「とりわけ」又は「大層」役に立つとみなしており，これと同程度に「適切」であるとするものがいた。

自立につながる労働体験や，その他の奉仕活動は，ＩＣＵのキリスト教と民主々義を支える教育的意義を持つと云えるであろう。このような体験を持たせることは，教育を適切にして意義深いものにし，理論と実践とを統合するのにあずかって大いに力のあるものであろう。しかしながら，労働体験の重要度に対する卒業生の評価は，国際的な経験や学問的経験に対するものよりもかなり低くなっている。それでは，ＩＣＵの行政と教育計画の担当者は，果して労働体験を「とりわけ」あるいは「大層役に立つ」とみなすべきなのだろうか。また，ある学生たちには，学部時代に学外での定期的なパートタイムの仕事，企業内訓練などの就労を含めて，６年から８年の就学計画をたてるように奨励すべきなのだろうか。

453名の回答者のうち，42%の人々が，ＩＣＵの就職斡旋を「あまり」又は「全く」役に立たなかったと言っている。これは，卒業生の49.4%が，大学時代の勉学や彼らの関心と関連が薄いか，又は全く関連のない職種についていることと大いに関係がありそうである。さて，より肯定的な面を取りあげてみると，50.6%が適正な職種につくことができたとしており，58%が，就職部は「適切」又はそれ以上に役立つとしている。この事実は，大学卒業者の多い日本国内での実績として，ＩＣＵの就職部がそれ相応の成果を収めていると同時に，まだまだ改善の余地とその必要性のあることを明白に示している。ＩＣＵ教育の他の側面との関連で，この改善への可能性を考えてみよう。例えば，本学の国際性・高い学問的水準・キリスト教主義という目標と学生個人個人の目標が両立できるようにすること，また，より多くの学生がＩＣＵ独自の教育を享受することなどが考え

られる。また最近では広い視野と資質を要する職業が増えてきた。二か国語を駆使する能力，国際的な志向，一般教育，専門的な学問，校外実習や実地訓練の経験などが生かされれば，ＩＣＵの卒業生は，これらの職業につくのに都合のよい条件を満していることは明白である。ＩＣＵの学生は，現在は未だ世間で認められず教育計画もないような，しかもこれからの社会が必要とする職業，例えば老人への奉仕などへの職域へ，刷新的な接近を試みるよう奨励されるべきである。

個人的な問題，職業選択，あるいは宗教の問題に対するカウンセリングは，ＩＣＵのプログラムの21の側面のうちでは最も低く評価された。これらは，15%が「とりわけ」又は「大層役に立つ」とし，28%にとって「適切」であり，45%が「あまり役立たない」とし，12%にとって「無駄」となっている。重要度についても，21の側面中で，これまた最も低く評価されている。有用度と重要度の回答を比べてみると，ほぼ18%の人々にとっては，彼らの欲求が満たされていなかった，ということになるようである。しかし，本人が感ずる欲求以上に，意識されない欲求が働いているのかもしれない。例えば，次のような学生たちは，他の学生たちよりも高い有用性と重要性を与えている。

a）西洋的東洋的を問わず，宗教を信じている人々。

b）既婚者又は再婚者。

c）大学院卒業生および教職についている人々。

d）最初６年間の卒業生。

e）第一男子寮および第一，第二女子寮の寮生であった人々。

f）学生会執行部に関係した人々。

g）主婦又は経営者。

h）教会や市民団体で活躍している人々。

i）専修学科と関連のある仕事に従事している人々。

j）ＩＣＵが彼らの「現代社会における日本」についての見方に役立ったと考える人々。

k）自分の子女をＩＣＵに入学させたい人々。

4.　学生活動と自治会

文化系クラブと娯楽・スポーツクラブは有用性と重要性共に同じ程度に認められている。回答者の４分の１は「とりわけ」又は「大層役に立つ」と云い，２分の１は「適切である」とし，あとの４分の１が「あまり役に立たない」か「無駄である」と認めている。このような反応は，現在の学生たちの参加の状況を現わしているかもしれない。だが，過去６年間における学生会執行部の不在のもとで，これらのクラブ活動には一体何が起こったのであろう。

学生会と学園新聞は，有用性も重要性も共に学生活動の中で最低に評価され，事実21のＩＣＵプログラムの中でも最下位である。回答者の９％が「とりわけ」又は「大層役に立つ」と考えており，36％は「適切」なもの，そして55％が「あまり役立たない」か，全く「無駄である」と答えている。

これは一つの挑戦と考えられる。学問の府における活力と士気は，学園新聞に依存するところが大である。学園新聞の第１面には，学園，地域社会，国内及び国際問題のニュースなどが盛られ，それが食堂や寮やクラブや教室や協議会の場で交わされる対話の中に組み込まれていくのが常である。第２面は，編集者や読者の声を反映させるとよい。第３面では，学内のすべての活動を報道し，クラブ活動，コンボケーション，チャペル，大学の特別プログラム，校外見学その他の興味をひく行事などの予告と報告記事が載せられるべきであり，第４面には，月々の行事カレンダーを掲載することによって人々に事前にスケジュールを調整させて，多くの参加を期待することができるはずである。

学園新聞は，学生の納める購読料，大学からの補助金，広告の収益などによって賄われるであろう。それ故に，新聞は，それを支持する学問的共同体のすべてから信用されて奉仕する義務がある。編集者とマネージャー

は，このような責任を頭に置いて選ばれるべきである。そして，一度選ばれたならば，編集者は自分の自由な編集方針と，新聞の主旨とを調和させなければならない。

編集者とマネジャーの選出と学園新聞の自由と云うことは，最も重要な課題であろう。もしそれに関する方針が，学生―教授―行政部合同の協議会又は研究会によって注意深く検討され，決定されるものでなければ，その新聞は学園の絶え間ない紛争の元となり，更には新聞自体の信頼性ばかりか，それに従事する人々やプログラムの信用をもむしばむこととなるであろう。とは言うものの，このことは，新聞とその政策のもつ可能性を過少評価するものではない。これは，ある学生にとってはマスメディアにおける専門的な実力とリーダーシップを養うための貴重な教育的機会となり得るし，また全ての学生にとっては，新聞の信頼性と質の良否の判定のし方を学ぶ教育の機会となり得るものである。

学園新聞は，少数の思想的グループによって占有されてはならないが，彼らの意見にも発表の場が与えられなければならない。学園新聞は，その作業に参加する全ての人々にとって極めて豊かな教育の材料であり，またキャンパスの住人の誰もがその発行を待ち，それに飛びつく程興味をそそるものでありたい。このような新聞であれば，卒業生にとって「役に立たない」とか，「重要でない」などとみなされるはずはない。しかし，何もせずにいたのではこのような新聞は生れない。このような必要性と素地は，教育によって培われてゆくべきものである。そこで，それをどう育てて行くのかという問題は，学内構成員の代表者による慎重な検討に値する。このような新聞は，効果的に機能する学生会なしには，おそらく出現しないであろう。

前例を見ない急速な社会の変化と構成員の混乱は，皆の同意によって方針を決めるという基盤を揺がし，地方自治体や中央政府の行政者に，かれらの権威主義を一層助長させる恰好の機会を与えることになる。この点は大学も決して例外ではない。教授会や学生たちからの同意が得られない場

合，日本でもアメリカでも大学の学長や行政職員は，色々な派閥から一斉射撃を受けて辞任せざるを得ないか，さもなくば，その決定事項を法と警察の力によって押し通す他はない。このいずれも，学問共同体にとっては名誉なことではない。

学生会は，学生の間でリーダーシップと責任ある市民性を伸ばすための実験場となり得るものである。ところが全員指導者となる力を持っているＩＣＵの学生の過半数が，学生会は有用でも重要でもないと信じている。これは学生会に対する幻滅から生じたものか，あるいは学生会のあるべき姿について，ビジョンに欠けたためなのか，いずれにしても一つの悲劇と云わざるを得ない。

回答の結果は，最初６年間の卒業生が，学生会を持たなくなった最近６年間の卒業生よりも，学生会をずっと高く評価していることを示す。学生会のメンバーであった卒業生は70%が学生会を「役に立つ」と見なしているが，メンバーでなかった人々では40%しか「役立つ」と見なしていない。

有用な学生会とは，外部が望んだり学生に強制したりしただけでは成立しないものである。大多数の学生がそれを望まない限り，権力を求める少数派が学生会を独占し，執行権と費用とを彼らの目的のために利用せんと狙っている。ここでは，ただ，学園市民の広い関心と参加によって，強力な学生会が設立される必要性を強調したい。学園は，この点について，大学のキャンパスも国家となんら変りがないのである。

なぜ学生会が日本及び諸外国の大学キャンパスから消え去ったのだろうか。学園市民としての学生たちの無関心から来るものだろうか。ある特定の利益集団に占有された結果だろうか。行政部や教授会から信頼と敬意を受けなくなったためだろうか。これらの疑問は，日本やアメリカの中央政府に問われているものとは異なるだろうか。もしわれわれが学園という身近かなところで秀れた政治を行なうことができないならば，更に複雑な実社会における政治に対して，どのような希望を抱くことができるのであろ

うか。学園内において効果的な自治を推進させる責任を放棄するような大学は，自由で創造的な活動を保証する代議制民主々義を危機に陥れているのではないだろうか。これらの疑問は，慎重な，系統的な分析に値するように思われる。ＩＣＵが第二の四半世紀に向うにあたり，これはまさに時宜を得た一つの挑戦である。

学生会ももたない大学が，学生と教職員と行政者が民主々義の発展過程とその価値を研究し，実際に経験する実験場であるなどいえるわけがない。もし学生が学生会を有用または重要と見なさないならば，そのことは，大学の掲げる一つの重要な目的に対する挑戦ではないだろうか。学生会の存在を奨励し発展させるのは，少数の者だけの責任だろうか，それとも学園全体の責任だろうか。そして，それは一般教育に規定されたどのような目標にも劣らない重要性をもつものではないだろうか。もしそうであれば，大学全体のプロジェクトとして政治の哲学，目的，構造，自由と責任の研究に３単位を与え，各学生に単位を与えると同時に，行政部と教授には教授時数として考えることができないものだろうか。

下位集団の間に見い出される一貫した差異へ言及する前に，是非とも一言述べておきたいことは，卒業生の男女別回答には，21の側面の有用度と重要度の評価に殆んど差がなかったことである。これは，ＩＣＵにおける共学の目的が，素晴らしい成果を挙げていることを示すものである。

5.　グループ間に見られる顕著な差異

１）質問紙への記名を回答者の自由としたところ，約24%が記名しなかった。記名した人々に比べ，語学教育，国際交流の経験（プログラム，教授，学生），教授との接触，寮生活の有用性と重要性の評価が低かった。プログラムの他の側面については，無記名者も記名者も，ほぼ同様の評価を下した。

２）宗教に関する問への回答も随意であった。宗教をもつ学生は，東洋的（5.3%）と西洋的（30.9%）とを問わず，無宗教の者（27.8%）や無回答

者（36.0%）にくらべて，プログラムのほとんどの側面を，より有用で，より重要とみなす傾向があった。

3）最初の6年間の卒業生は，次の6年間の卒業生にくらべて，プログラムのほとんどの側面を，有用度も重要度もずっと高く評価した。同じ様に，第二の6年間の卒業生は最近6年間の卒業生よりも，すべてを高く評価している。

4）大学院に進学しなかった卒業生は，進学した人々とくらべて，国際的交流の経験の有用度については同じ様な評価を下しているが，その重要度の評価が相対的に低かった。

5）第一男子寮及び第一女子寮に住んでいた卒業生は，他の寮に住んでいた人々にくらべて，プログラムの国際的側面とカウンセリングをより高く評価している。

6）学生会の仕事に参加していた人々は，参加しなかった者にくらべて，学生会活動を含むプログラムのほとんどすべての側面を，より有用で，より重要だとみなしている。

7）教会，市民団体，及び専門職業団体の活動にたずさわっている卒業生は，そうでない者にくらべて，学生会を含めてプログラムのほとんどすべての側面を，より有用で，より重要だとみなしている。

8）卒業生の半数は，その職業が自分の関心や専攻学科に直接関係している。これらの人々は，現在の職業が在学中の関心や専攻に間接的にしか関係していないものにくらべて，プログラムのすべての側面を，はるかに有用且つ重要なものとみなしている。そして後者は，その職業が自らの関心や専攻に全く関係していない者とくららべると，プログラムの諸側面において，有用度や重要度に一貫してより高い評価を与えている。

9）ＩＣＵでの経験が「現代の世界における日本の姿」をとらえるのに役立ったと云う53.5%の人々は，回答しなかった者（30%）や否定的な回答をした者（16.5%）にくらべ，保健サービス，クラブ活動，学生会および新聞会を除く他のすべてのプログラムを，より有用で，より重要なものと

評価している。

10）子女をＩＣＵに入学させたいと希望する80%の卒業生は，そうでない者にくらべて，学生会と新聞会を除くＩＣＵのプログラムすべてを，より有用度の高いものと評価している。

一般的な要約では，これらの相違をプログラムの特定な側面と関連づけて考えた。ここでは，われわれは各グループの間で一貫して大きな差異を見せる回答が意味するところのものを考えてみたい。

確かに，これらの項目の回答における各グループ間の差異が示唆するものは，相互に関連性を持つと考えられ，そこからはもちろん重要な結論が導き出されるであろう。しかし，それは容易なことではない。果して明確に把握し得るような因果関係が存在するのだろうか。それともそれらは相対的なものなのだろうか。そして，ここで学園経験に根ざすものなのか，あるいは社会全般に根ざしているものなのか。例えば最初の6年間と，次の6年間と，最近6年間の卒業生との間の回答内容の差を，どう解釈したらよいのであろうか。

a）教育の有用性と重要性が卒業生によって意味のある評価を受けるためには，大体何年間の経験が必要だろうか。

b）1969年から74年にかけて社会に巣立っていった卒業生は，57年から62年の間に卒業していった者と同じような機会と社会的要請に直面したのだろうか。

c）大学で受けた経験の強みは，卒業生が中年世代になっていく中で次第に輝きをましてくるのだろうか。

d）若い世代は，一般的にいって教育に対し，より批判的になってきてはいないだろうか。

このような疑問には，ある程度の真実性が含まれているかもしれない。しかし，それだからと云って教授会や行政部の人々が，問題に対応する機

会と責任の回避を正当化するような事になるとすれば，それはまことに残念なことである。もしも，ＩＣＵの在学経験の有用度と重要度が減少しつつあるとする最近の卒業生のデータが事実であった場合，このような消極的態度は不幸な結果を招かないだろうか。

しかしまた，上に述べた疑問より，もっと妥当な観点もあり得よう。ＩＣＵは，その時期と場所において非常に独得の意義をもって開設された。最初の６年間は，学部と大学院のプログラムの新構想を発展させることに費し，当時は，自発的な改革を要求する声も強く，創造的な批判と反省を不可欠と考えた。活気に満ちた雰囲気がすべての人々に浸透していた。しかし３年目に入ると，語学教育のプログラムで内容も授業過程も最初２年のくり返しが始まり，一般教育においても同様の現象が起ってきた。そして７年目に至っては，ただ前年に行なったからという理由のみで諸々のプログラムが消化されるようになり，革新性は薄れ，計画立案を支える活力や批判精神もしぼんでいった。万事はある程度うまく進んでいたが，大学は老成への第一歩を踏み出したのである。今日まで，大学は独自のプログラムの中に，たゆまざる自己改革の過程を組み込むことにあまり成功しなかった。今後，大学は５年内至７年毎に，すべてのプログラムについて再検討し，己れの存在価値を再確認する事を義務づける必要があるのかも知れない。すなわち，ＩＣＵは創立25周年を契機として，この大学の独自性を時と所に応じて最大限に発揮できるよう，新しい目標を設定し，行政者・教職員・学生の三者が一体となって，自らの新しい関心と要望を満たしつつ，創造的な批判精神を培うことのできる有意義な計画を打ち出す必要があるのではないだろうか。

いつの時代にも，開拓を待つ新しい分野は存在し，それは一見複雑で，とても手がつけられそうには思えないものである。しかし，1951年，敗戦の日本が世界諸国の仲間入りをせんものと励んだ当時，まだ創立の陽の目を見なかったＩＣＵが直面した難題と比較すれば，それを乗り越えた実績と十分な経験を持つ25年後のＩＣＵにとって，これらの課題は遙かに容易

なものとは言えないだろうか。しかし，現在でも妥当な最初の目標からかけ離れてしまうことと，昔通りでは激動する社会の新しい要求に応ずることが困難であるということは同じでない。ＩＣＵのプログラムに関係する責任者はこの双方の問題をよく見きわめる必要があろう。

Ｖ．結　論

ＩＣＵ在学中の国際的交流の経験に関する卒業生の評価は，その経験が極めて有用且つ重要であったことを示している。これには語学教育，図書館，国際的な教授や学生との交流，そして，国際的な寮でのプログラムや日常生活を含んでいる。これらの側面は，通常の期待を遙かに凌ぐ成功を収めてきた。このように，ＩＵＣは，重要な世界的問題に眼を向けながら，絶えず生起する教育的課題に対処する人々のためのリーダーシップを育ててきた。

専門教育，一般教育，教授との接触，アカデミック・アドバイザー，経済的援助，労働体験などは，卒業生の大部分が「適切」,「大層」，又は「とりわけ役に立つ」と評価している。ＩＣＵプログラムの中でも，これらの側面は，日本の高等教育において全く独得なものであり，大いに賞讃されて然るべきものと思われる。少数ながら，これらの側面に「あまり役立たない」，或いは「無駄である」と答えた人々のいることは，まだまだ改善を必要としているものと受け取れる。

他のプログラムと比較すると，学園内の宗教的経験は低い評価を受けている。しかし，圧倒的にキリスト教的でない社会とキリスト教信者でない学生の多いことを考えると，学園内の宗教的な生活やプログラムは，多大な影響力を持つと信じられる。それと同時に，この宗教活動は，キリスト教に無関心であったり，不満を抱いている学生に対して，恐れや圧力を与えずに，絶えず彼らとの対話を続けていかねばならないという，この学園の至る所に見られる問題に直面するものである。

日本において，ＩＣＵのような新しい大学の卒業生の半数が適職を得ているということは，褒むべき成果ではあろうが，他の半数が満足のいく就職ができていない状態では，決して自己満足に陥るわけにはいかない。

課外の文化活動，レクリエーション及びスポーツは，大多数の者によって「適切」，「大層」，或いは「とりわけ」有用とみなされている。

過去６年間の学生会執行部の不在は，ＩＣＵ構成員のすべてに，ＩＣＵの主要な目的に寄与するはずの学生会の力を過少評価させているように思われる。卒業生の大部分は，学生会や学生新聞に対してある程度の重要性を認めようとしているが，殆んど，或いは全く有用性を見出さない者の数が次第に増加してきているのが事実である。

1949年，ＩＣＵは，最高の学問的水準を保つ国際的なキリスト教主義大学という構想の下に計画され，行政部と教職員と学生達が，民主々義及びキリスト教的兄弟愛の価値を学び，実践の過程を身をもって経験することができる実験場として考えられた。ある面においては，大いに成功を収め，ある面では比較的成功し，他のいくつかの面で期待にそむいた失敗に終わっている。この研究から，ＩＣＵの長所と短所が何処にあるかが，多くの次元で明らかにされたのではないだろうか。

高等教育における一つの冒険的企てであったＩＣＵは，勇気と創造性と英知とをもって第二の四半世紀に立ち向かう構成員を育成してきた。そこでは，比類なく有用と立証された点は益々強化され，かなり成功してきたものは更に改善され，大きな弱点については，これを回避せず，正面から取り組んで良き解決法を探り，更には，普遍的意義を持つＩＣＵの理念と目的達成のために献身を続けながら，その時と場所に応じて発生する種々の新しい挑戦を受けとめていく必要があるのである。

このことは，ＩＣＵを構成するすべての人々にとって，自らを活かす機会でもあり，又重大な責任を遂行する場でもある。勿論，主要な課題は，教授会と行政部が受けとめることになろう。しかし，いくつかの重要な側面において，責任は学生にはないとも言えない。卒業生によって明らかに

された弱点のいくつかは，本来は彼らが在学中に，無関心だったり，安易に責任を回避したことに起因し，そして，卒業した後になって，実はそれらが大層有用であると認めている点かもしれない。最後に，ＩＣＵの将来は，大学が組織として持っている長所，短所ならびにその可能性をよく心得た大学理事会の構成員によって，これから打ち出される方針の如何に大きく関わっていると言えるであろう。

注

（1） Troyer, M. E., Hara, Ka., Hara, Ki. and Tanaka, K. Alumni Evaluation of Their ICU Experience——Follow up of alumni as a study project for commemorating the 25 th anniversary of founding International Christian University. ICU Library.

付記

1974年６月から同年12月に至るまで，終始この調査を後援し激励してくだされた本学理事会，行政当局および同窓会に対し，また，調査に実際にご協力くださった同窓生の諸兄姉や，研究に参加した学生諸君，ならびに Dick-Hunter Memorial Fund に対し，調査担当者一同心より感謝の意を表します。

【付　　録】

同窓会会員の皆様　　１９７４年6月

冠省

このたび，国際基督教大学ならびに同窓会の共同プロジェクトとして，同封の調査用紙を皆様へお送りすることになりました。同窓生の手によつて，母校在学中の経験を評価することは，この大学が第二の四半世紀を迎え，今後ますます教育の実を挙げる上に極めて大切なことと存じますので，何卒よろしくご助力賜りたくお願い申し上げます。

御殿場において丁度今から25年前，本学の理事会と評議員会が結成され，国際基督教大学の発展のための当面の目標と重点が論議され承認されました。今年は語学研修所が開設されてから23年目，教養学部の大学として認可されてから22年目，第一期卒業生を社会に送り出してから18年目に当ります。

卒業生の方々が，次第に社会の重責を負われる立場に立たれるようになられるにつれ，日常生活において，又専門の職業において，ＩＣＵにおける経験が果して役立っているかどうかを評価していただくことの意義が益々深まってまいりました。また最近卒業された方々による評価は，大学が変革の必要性を見い出す上で，これまた非常に大切なものであります。

この調査が皆様のご意見を公正に代表できるか否かは，偏えに皆様の卒直なお答えが直ちに得られるかどうかにかかっております。調査用紙に回答するためには10分余りの時間で充分ではないかと思われますが，もしいろいろなご意見やご示唆をいただくためには，多少それよりも長くかかるかも知れません。返信用封筒を同封しましたのでご利用下さい。早速ご返答下さり，明日投函して下されば誠に有難いと存じます。

この調査は M. E. トロイヤー博士，原一雄，原喜美両教授が担当されます。

重ねて同窓会会員の皆様のご協力を切にお願い申し上げます。　　敬具

学　　長　篠 遠 喜 八
同窓会会長　位 下 浩一朗

The ICU Alumni Association joins the ICU Administration in sending you the enclosed questionnaire. Evaluation of the ICU experience by early and recent alumni will be useful as ICU seeks to move with increasing effectiveness into its second quarter century.

Twenty-five years ago the *Rijikai* and *Hyogiinkai* were organized and the immediate purpose and priorities for the development of ICU were adopted at Gotenba. It has been 23 years since the opening of ICU with a Language Institute; 22 years since the chartering of the Liberal Arts College and 18 years since the first class graduated.

As Alumni move into positions of increasing responsibility they can meaningfully assess ways in which their experience at ICU has helped, failed to help, or hindered their ability to cope with life in general and their professional responsibilites. Evaluation by alumni who graduated more recently is equally important in helping the university see needs for change.

Representative conclusions require prompt and forthright responses. It will take about ten minutes to answer the questions — a bit lenger to write your specific sugeestions. The return envelope is addressed, stamped and ready to mail.

Dr. Kazuo Hara, Dr. Kimi Hara. and Dr. Mauriee Troyar are responsible for the study. We urge the full alumni participation.

Respectfully,

KOICHIRO IGE
PRESIDENT ICU ALUMNI ASSOCIATION

YOSITO SINOTO
PRESIDENT

P.S. Mailings abroad do not have return postage.

大学創立25周年記念　卒業生による在学経験の評価

25th ANNIVERSARY ALUMNI EVALUATION OF ICU EXPERIENCE

1. 氏名（随意）
   Name (optional) _____

2. 性（男／女）
   Sex (M/F) _____

3. 現住所（都道府県，州，国名）
   Your prefecture, state, or country now _____

4. a. 出生による国籍
   Nationality by birth _____

   b. 市民権
   Citizenship _____

5. 宗教（随意）
   Religion (optional) _____

6. 既婚　独身　離婚
   Married____Single____Divorced____

7. a. 在学中の専修分野

What was your area of concentration?_____

b. 所属専攻学科　　c. 教員免許状の取得の有無

In what Division? _____Did it include teacher certification?____

8. ICU卒業年度　　9. 学位

What year(s) did you graduate from ICU_____With what degree(s)___

10. 大学院課程への進学

Did you pursue graduate studies?_____

	教育機関 Institution	在籍年数 Number of years	学位 Degree	専攻 Major
a.				
b.				
c.				

11. ICU卒業後の海外生活

How much time have you spent abroad since leaving ICU?

	国名 Name of cuntry	滞在期間 Duration of stay	目的 Purpose
a.			
b.			
c.			

もし書ききれない時は，余白を使うか別紙を添付して下さい。)

(If more space is needed, please use questionnaire margins, or attach separate sheet of paper.)

12. 在学中の主なる住居　　a. 自宅又は親類と同居

While at ICU did you live mainly:　　at home or with relatives?_____

b. 下宿又はアパート　　c. ICU寮（○印を付ける）

in a rooming house?_____　　in an ICU dormitory (encircle)　IMD　IIMD　Canada　IWD　IIWD　IIIWD　IVWD　Sibley House

13. Activities in which you participated:

あなたが参加した課外活動は

Check		List
_____	学生会	Student government_____
_____	出版活動（新聞その他）	Pablications (Newspaper, etc.)_____

_____	文化系クラブ	Cultural Clubs_____
_____	娯楽・スポーツクラブ	Recreational & Athletic Clubs_____
_____	奉仕活動	Community services_____
_____	その他	Other_____

14. 現在の職業

What is (are) your present occupation(s)?

a.

主 Full-time	副 Part-time		
_____	_____	専門職	Professional
_____	_____	学生	Student
_____	_____	研究・教職	Research/Teaching
_____	_____	管理職	Managerial
_____	_____	事務	Clerical
_____	_____	主婦	Housewife
_____	_____	自営	Independent (Self-employed)
_____	_____	その他	Other_____

b. 企業・機関の種類

Type of Enterprise/Institution

_____	貿易	Trading
_____	生産	Production
_____	銀行・金融・保険	Bank/Securities/Insurance
_____	通信・広報	Communications/PR
_____	官庁・役所	Government service
_____	社会福祉	Social welfare service
_____	宗教	Religion
_____	教育	Education
_____	その他	Other:_____

c. Is your employer or agency: Japanese_____ North American_____
企業主 日系 北米系

Europian_____ African_____ Asian_____ South American_____
欧州系 アフリカ系 アジア系 南米系

South Pacific_____ Multinational_____
太平洋州系 多国籍

（もし名刺があれば同封して下さい。自分の名前は切り抜くか黒く塗りつぶ

しても結構です。)

(If you have a calling card, please clip it to this evaluation. You may cut or black-out your name if you wish.)

15. 地域社会における諸活動　　教会　　市民

What community activities are you involved in? Church___ Civic___

職業別　　奉仕団体　　その他

Professional_____ Service Club_____ Other:_____

16. ICUを離れてから，あなたに機会が与えられ，責任を負わされた主な仕事は

Has the main stream of your opportunities and responsibilities since leaving ICU been:

a. ICU在学中に抱いていたあなたの関心や在学中に受けた教育と直接関係している。

directly related to your interest and preparation at ICU:_____

b. ICU在学中に抱いていたあなたの関心や在学中に受けた教育と僅かに関係している。

marginally related to your interest and preparation at ICU?_____

c. ICU在学中に抱いていたあなたの関心や在学中に受けた教育と全く関係ない。

unrelated to your interest and preparation at ICU?_____

17. 次に挙げるICUのプログラムについて，夫々現在あなたがどの程度役に立つと感じ，どの程度重要であると認めておられるのか，下の数字を用いて評価して下さい。

Here you have an opportunity to evaluate the program of ICU in terms of usefulness you feel with each aspect of it and the importance you now attatch to it.

有用度

DEGREE OF USEFULNES

1. 取りわけ役に立つ　Especially useful
2. 大層役に立つ　Very useful
2. 適切である　Adequate
4. あまり役立たない　Not very useful
5. 無駄である　Of no use

重要度

DEGREE OF IMPORTANCE

1. 極めて重要　Extremely important
2. 大層重要　Very important
3. 重要　Important
4. それほど重要でない　Not very important
5. 全く重要でない　Unimportant

有用度 Use-fulness	重要度 Import-ance		意見（もしあればお書き下さい） Comments, if any
____	____	a. 一般教育	General education____
____	____	b. 専門教育	Studies in your Major____
____	____	c. 語学教育	Language training____
____	____	d. 図書館	Library____
____	____	e. あなたのアドバイザー	Your Academic Advisor____
____	____	f. 教授たちとの接触	Interaction with faculty____
____	____	g. 国際的交流の経験	Experience with international
____	____	教授	(1) faculty ____
____	____	学生	(2) students ____
____	____	行事	(3) program____
____	____	h. 宗教活動と経験	Religious program and experience____
____	____	i. カウンセリング（身上・就職・信仰相談その他	Councelling service (Personal, Vocational, Religious,etc.)____
____	____	j. 経済援助	Financial aid program____
____	____	k. 保健サービス	Health service____
____	____	l. 就職の斡旋	Placement service____
____	____	m. 学生会	Student government____
____	____	n. 新聞会	Newspaper____
____	____	o. 文化系クラブ	Cultural clubs____
____	____	p. 娯楽・スポーツクラブ	Recreational & athletic clubs____
____	____	q. 寮生活	Dormitory life____
____	____	r. 労働体験	Work experience____
____	____	s. その他	Other :____

18. ICU在学中に得た経験は，次のような場合に果して助けになったか，或は邪魔になったか述べて下さい。

Has your experience at ICU helped, failed to help, or hindered you in coping with:

a. 日常生活一般
Life in general: Explain.

b. 専門の職業において
Professional responsibilities: Explain.

19. 「現代社会における日本」についてのあなたの見方に，ＩＣＵがどのような影響を及ぼしたか述べて下さい。
Has ICU influenced your views of "Japan in the Modern World"? Explain.

20. あなたはお子さんをＩＣＵへ入学させたいとお考えになりますか。　はい　いいえ
Will you encourage your children to come to ICU? Yes___ No___

もし「はい」なら，何故かを述べ，どのような改善をお望みか示唆して下さい。
If yes, state why and then suggest improvements you hope will be made.

もし「いいえ」なら，その理由を述べて下さい。
If no, give reasons.

Alumni Evaluation of Their ICU Experience

Maurice E. Troyer
Kazuo Hara
Kimi Hara
Kiyohiko Tanaka

Aiming to discover the impact that ICU has had on its alumni, a questionnaire was mailed to all alumni whose addresses were available. Out of approximately 2200, 547 or approximately 25% were returned.

Alumni evaluation of their *international* expriences at ICU indicates that it has bee extraordinarily *useful* and *important*. This includes *language training*, the *library*, experience with an *international faculty*, *students* and *program* and life in *inter-national dormitories*. These aspects have been successful far beyond reasonable expectations. ICU is thus well prepared for continued leadership in meeting emerging challenges of education with orientation to crucial global problems.

Major studies, *general education*, *interaction with the faculty*, *academic advisement*, *finacial* and *work experiences* are rated "adequate," "very" or "especially,, *useful* by a large portion of the alumni. This would seem to be a very creditable achievement, for all of these aspects of the ICU program are quite unique in the higher education of Japan. The minority of alumni who found them of "little" or "no" use provides a solid challenge for improvement.

Compared with other aspects of the ICU program, *religious*

experience on the campus has a low rating. But there are reasons to believe that in a predominantly non-Christian society and student body the ICU religious life and program on the campus has great strength. It faces the ubiquitous problem of keeping dialogue open with disinterested critical and disaffected students without intimidating or pressuring them.

Effective *placement* of half of the graduates of a new university in Japan is a creditable achievement. But the other half, not satisfactorily placed, leaves no room for complacency.

Extra-curricular cultural and *recreational clubs* are rated as "adequate," "very" or "especially" *useful* by a substantial majority of alumni.

The absence of student goverment during the past six years seems to indicate that all constituencies underestimate their potential contribution to major objectives of ICU. Increasingly alumni have come to see little or no use in *student government* or the *newspaper*, though most of them are inclined to regard them with some *importance*.

In 1949, ICU was projected as an international, Christian institution with the highest academic standards. It was to be a laboratory where adminstration, faculty and students could study and experience the values and process of democracy and Christian brotherhood. It has been outstandingly successful in some respects, moderately successful in other respects and disappointingly unsuccessful in a few respects. The nature of ICU's strengths and weaknesses are revealed in many dimensions by this study.

ICU as a venture in higher education has prepared its constituencies to move into the second quarter century with courage, resourcefulness and enlightenment to strengthen what has proven uniquely useful, to improve what has been moderately successful, to cope with what has been its greatest weaknesses, to continue its commitment to purposes of abiding significance and to accept

new challenges unique to time and place.

This is both an opportunity and responsibility of all constituencies. The main challenge is to the faculty and administration. But it is, in some important respect, a responsibility of students. Some of the weaknesses revealed by alumni may indeed be the result of their disinterest or efforts to avoid that which they later regarded as very useful and important. Finally the future of ICU depends in great part on policies of the trustees built on familiarity with the strengths, weaknesses and potential of the institution.